

氏名（本籍） 岸本 哲弥（福岡県）
 学位の種類 博士（音楽）
 学位記番号 乙第15号
 学位授与年月日 令和5年3月18日
 学位授与の要件 学位規則第3条第4項
 学位論文題目 フランツ・リスト Franz Liszt（1811-1886）のピアノ独奏作品に
 おける和声語法の変遷
 —「島岡理論」による機能和声の観点からの試み—

学位論文等審査委員

(総合審査)	委員長	教授	神部 智
		教授	河原 忠之
		教授	近藤 伸子
		教授	阪上 正巳
		教授	津田 正之
(演奏審査)	委員長	教授	神部 智
		教授	河原 忠之
		教授	近藤 伸子
		教授	三木 香代
			渡辺 健二（東京藝術大学名誉教授）
(論文審査)	委員長	教授	神部 智
		教授	近藤 伸子
		教授	阪上 正巳
		教授	津田 正之
			稲田 隆之（武蔵野音楽大学教授）

審査結果の要旨

審査所見

学位審査委員会は、申請者・岸本哲弥（博士後期課程器楽研究領域・ピアノ）の学位修了リサイタル並びに学位申請論文に関して厳正な審査を実施した。以下、審査所見を記す。

学位修了リサイタルにおいて、申請者は下記のプログラムを破綻なく十分な安定感をもって演奏した。申請者のリスト作品の演奏は誠実な取り組みと入念な準備を伺わせ、全体として完成度が高いものであった。各曲の性格を捉えて緻密に表現しようとする姿勢のみならず、演奏者としての個性も伺うことができ、リスト作品に申請者独自の解釈を加えた点は高く評価したい。

F. リスト（1811-86） Franz Liszt

《巡礼の年》第2年「イタリア」 LW-A55/S161 より

Années de pèlerinage, deuxième année, Italie

7. ダンテを読んで ソナタ風幻想曲

Après une lecture du Dante, Fantasia quasi sonata

《巡礼の年》第3年 LW-A283/S163

Années de pèlerinage, troisième année

1. アンジェラス、守護天使への祈り

Angelus! Prière aux anges gardiens - Gebet an die Schutzengel

2. エステ荘の糸杉に、哀歌 (I)

Aux Cyprès de la Villa d'Este - Den Zypressen der Villa d'Este, Thrénodie (I)

3. エステ荘の糸杉に、哀歌 (II)

Aux Cyprès de la Villa d'Este - Den Zypressen der Villa d'Este, Thrénodie (II)

4. エステ荘の噴水

Les jeux d'eaux à la Villa d'Este - Wasserspiele in der Villa d'Este

5. ものみな涙あり (ハンガリー旋法による)

Sunt lacrymae rerum. En mode hongrois - In ungarischer Weise

6. 葬送行進曲

Marche funèbre

7. 心を高めよ

Sursum corda - Erhebet eure Herzen

一方、演奏表現は論文の研究成果と結びついてこそ説得力を持つものである。学位申請論文で詳細に分析されたリストの和声語法が演奏表現に反映されていたかという点については、十分に成功したと言いき難い。また、適切なフレージングや調和の取れた和音のバランスなどの点に問題が見出され、一様で潔癖なペダリングもデモーニッシュな響きの効果を生み出せない一因となっていた。理論と実践を融合した説得力ある演奏表現の側面において、今後の課題が見いだされたことを指摘しておきたい。

申請者の学位申請論文「フランツ・リスト Franz Liszt (1811-1886) のピアノ独奏作品における和声語法の変遷—「島岡理論」による機能と声の観点からの試み—」は、リストの初期から晩年にかけての彼の和声語法の変遷に焦点を絞り、一貫して島岡理論に基づき明らかにしたものである。リストの膨大なピアノ作品の和声構造を時代変遷に従って解明しようとした労作で、演奏者にとっても有用性に富んだ研究であり、高く評価できる。特にリスト作品に島岡理論を応用した点は、本論文のオリジナリティといえる。

しかし、本論文においてもいくつかの弱点、あるいは今後の課題が見出された。まず、本論文の目的として申請者は「機能と声の観点から分析を行い、細部から全体構造までの『和声構造』とその『意味論』を明らかにする」と述べているが、最も重要と思われる「意味論」についてはその内容が不明瞭であり、論旨が明確に伝わってこない。論文冒頭で重要な概念は十分に検討し、論文全体の筋立てに一貫性を持たせるべきであった。また本論文ではリスト作品の全曲ではなく、数作品を抜粋して考察しているが、なぜその作品を分析のモデルとしたのか、その説明が不十分であった。島岡理論にとらわれるあまり、リストの斬新な作曲戦略を全て「機能と声」に閉じ込めてしまったことも大きな問題点である。例えば、晩年のリスト作品は調性感が希薄になっていくにもかかわらず、最初から機能的に解釈しようとする結論ありきで、多角的な視線が欠如している。そのため、膨大な和声分析の末にたどり着いた結論が、やや浅薄で説得力の弱いものであったことは惜しまれる。

なお、申請者は本学大学院在籍中にティーチング・アシスタントを積極的に行うなど、その

学修姿勢は真摯であった。また、東日本大震災支援コンサート（岸本哲弥ピアノ・リサイタル）を地元において複数回企画、実施しており、社会活動の経験も積み上げている。

以上の観点を総合した上で、「博士後期課程修了の認定に関する方針」に照らし合わせた結果、「博士（音楽）」の学位を授与するに相応しいものと判定する。